慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西藏語と支那語
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.134(688)- 134(688)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「西藏語と支那語」

近着の「通報」二十八卷一、二號に、カールグレン B. Karlgren 氏が、右の標題 Tibetan and chinese の本に、シモン氏の著作「西藏、支那語の語彙比較、試考」Tibetisch-Chinesische Wortgleichungen, Ein Versuch, Berliu 1930 (Mitt. Sem. Or. Spr. Berl. Bd. XXXII, 1929, Abt. I) に對する批評を掲載してをる。曰く、西藏語と支那語の語彙比較は、既に餘程以前から試みられてをるが、シモン氏に至つて、始めてその嚴密系統的な比較がなされてをる。

此問題を取扱ふには、チベット・ビルマ語族を先づ研究し、その祖語を再建し、之とタイ語の原初的形態とを比較し、次いで之と最も古き支那語とを比較しなければならぬ。然るにシモン氏は、直接西藏、支那兩語のみを捉へて比較して結論を得やうとしてをる。シモン氏の研究は、方法論的に危險性を帶びて居るが、然し一面から云ふと兩語共紀元後七世紀六世紀の發音が知られ、支那語の方は紀元前數世紀の發音も測定し得る強みがある。所が、カ氏は、シモン氏の古代支那語の終子音の再建に對する所說を全然許容せず、從つて其上に立脚した兩語の比較に反對して居る。シモン氏の比較は、あまりに多種の音を結びつけ過ぎ、兩語の祖語は、極めて種類多き音を持つてゐたとしなければならず、かつ單語の一つ一つの對應に、確實に然るべき必然性が乏しい。一體西藏語と支那語との差違極めて著しく、その親緣が論證されんがためには、印度・支那語族との比較研究に訴へなければならぬ。

今日の支那語に前添詞（プレフィックス）と語幹又は、語幹と後添詞（シュフィックス）との收縮して生ぜしものあることは、他の親族語との比較によつて解明せられる。從つてシモン氏が、支那語の語幹なりと信じてチベット語と比較したものに妥當ならざるものが多々存する。

その上前述の通りシモン氏は誤つた終子音で再建した古代支那語と西藏語とを比較してをるが、之も他の親族語と比較して行くと明瞭に同氏の方法を失つした點が證明される。かやうにカ氏は、明快にシ氏の論文の缺陷を指摘してゐるが、然し最後に、その著作の重要性、ごく普通の具體的な語彙の比較のみより成立し、西藏・支那兩語の最初の組織的な對應表である事を强調し、將來の研究者のその上に充分な檢討を加へゆかんことを期待してをる。

全く闇黑な此方面の比較言語學が、カ氏やシ氏の精勵によつて次第に黎明期に近づきつゝあるは慶賀に堪えぬ。尙「通報」の此號には Mironov 氏が梵文 Nyāyapravesa を校訂出版し Duyvendak 氏が王雲五の四角號碼檢字法を批評し、Moule 氏が、支那ネストリアン教徒に於ける十字の使用を論じてをり、最後にペリオ氏が百五十二頁にわたつて新刊書の紹介批評をされてをる。パリ言語學雜誌に於けるメイエ氏と相並んで蓋しペ氏の精勵振りは佛國學界の一偉觀である。（松本信廣）